
転生して異世界廻り ~ GOD EATER 編 ~

黎白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生して異世界廻り〜GOD EATER 編〜

【Nコード】

N1174Z

【作者名】

黎白

【あらすじ】

D・C・？の世界で死んだ主人公がゴッドイーターの世界に転生。「本当はフェアリーテイルの世界も行ったんだけどな。」
……………。蒼影のゴッドイーターとして生活が始まる？

ちなみに前作のように、ハーレム、原作崩壊、チート、最強要素があります。チート、最強は多分ですけど。後は他の作品のキャラがでるかもしれません。更新はD・C・？より不定期になると思います。感想どうぞんお願いします。

転生、アラガミとの戦い？（前書き）

こんな小説を読んでくれてありがとうございます。

転生、アラガミとの戦い？

「また、ここかよ。」

今俺が居るのは、転生の時に来た空間だった。

「ったく、お前はどれだけ恋人増やすんだよ。また全員ついて行くみたいだぞ？」

「夕紀か……。あいつらは？」

「多すぎるから連れてきてない。安心しろ、さっき行ったみたいに全員ついて行くみたいだから。」

まあ、今回は生きてた時に話したしな。

「なんか悪い。あ、次はGOD EATERで頼む。」

「本当に悪いと思ってんのかよ……。」

悪いとは思ってるが、それとこれとは別だからな。

「まあ、いい。で、誰を連れて行くんだ？」

「連れて行くのはそっちで決めてくれ。あの世界は危険多いからな。別に会おうと思っただら会える訳だし、危険多いからな。」

実際また転生するとは言え、目の前で死んだりしたら嫌だし、GOD EATERはFAIRYTAILより死の危険が多いからな。

荒神は手加減なんかしてくれないし。

「わかった。そうだ、この世界ではリンドウとサクヤは付き合ったりしないから。あと原作といろいろ変わってるから。」

あの二人付き合ったりしないんだな。でもどうして俺に言ったんだ？

「何で言ったんだ。」

「転生がリンドウとサクヤの幼馴染みだから、フラグ建てても気にしないようにな。」

リンドウ達と幼馴染みか……。てか今の失礼じゃないか？

「何でフラグ建ててるの前提だよ。」

「今の恋人数えてみる。原作キャラは基本的に全員、原作以外も建ててるだろうが。」

……………確かに。

「今回もそうとは「なるな。実は転生時にフラグ体質とか着けたから。」お前のせいだよ!？」

だからあんなにイベントが起こってたのかよ。

「って事でとつと行ってこい。だいたい原作四年前で十二才だからその頃には神機使いになると思うから。」

そこまで決定してるのかよ……………。

まあ、いい。今回も原作は気にしないでいいみたいだから、とことん変えていくか。

「蒼影、早く来いよ。」

「わかってる。」

今何をしてるかって？まあ、転生して八年が経った訳で、原作キラの雨宮リンドウ、橘サクヤと遊んでいる。ちなみにサクヤさんは十三歳リンドウは十八だ。

リンドウは俺の子守みたいな感じで遊んでるのが少しムカつく。

そつえば、リンドウが神機使いになるのっていつなんだ？原作とは違うんだから、どうでもいいんだけどな。

「どうしたの？」

「何でもないよ、サクヤさん、リンドウ。」

「いつも思うけど、何でサクヤはさん付けで俺は呼び捨てなんだよ。」

「

「アラガミいるかもしれないのに八歳を連れて行く奴にさんはいらないだろ。」

そう、俺はリンドウに連れられては花を見に行ってるんだけど、アラガミがいるかもしれないんだよ。てか本当に八歳連れて居住区でるか？

理由はサクヤさんの好きな花を取りに行くらしい。てかリンドウってこんなキャラだったか？

「いや、お前八歳にしてはおかしいだろ。」

「確かに蒼影って大人びているわよね。」

「ほらな、サクヤだってこう言ってるだろ。」

「だからってな……。まあ、いいや。こっちなのか？」

「ああ、この時代にしては綺麗な場所だから期待してる。」

こんな事になったのも、リンドウが規模は小さいが花畑を見つけたらしい。実際、アラガミがいるこの世界では珍しいからな。

「全くアラガミが来たらどうすんだよ。」

「その時は俺が囨「囨は無しな。三人で帰るんだから。」……わかっただよ。」

リンドウは原作でも自分を犠牲にしてたからな。無いとは思って、

俺がいる事でイレギュラーがあるかもしれないしな。

「蒼影の言うとおりよ。リンドウだけを置いていたりはしないわ。」

「わかったよ。あ、ここだ。」

「わぁ……。本当に綺麗ね。」

「確かに、こんな世界では珍しいな。」

「だろ？だから蒼影とサクヤに早く見せたかったんだよ。いつこの景色が無くなるかわからないしな。」

リンドウが連れてきてくれた場所には、小さいながらも必死に生きている花があった。

やっぱりこんな時代だからこそ、綺麗に感じるな。前の二つの世界は、こんなに荒れた世界じゃないから、こんな小さい花畑じゃあまり感じる事も無かっただろうな。

「でもね……。」

「あ？どうしたんだよ、蒼影。」

「いやさ、こんな場所にある花畑を知ってるって事はさ。」

「どうしたの、蒼影。何かあるの？」

サクヤさんも気が付いてないんだな。この年ならしょうがないか。

「少なくとも一回は一人でここに来たんだよね？」

そう。こんな場所知ってるのは一度来てるからで、少なくとも一人で居住区から出るっていう危険な事したんだよね。

何度かどこかに行ってるなとは思ってたけど、リンドウももう大人だし無視してたけど、これは流石になあ。

「いや、それは……。」

「蒼影の言うとおりね。リンドウあなたねえ。」

「アラガミに襲われなかったから良かったけど。」

「実際、襲われなかったけど、見た事は……。」

「はあ！？リンドウお前馬鹿かよ！？」

アラガミ見るって結構近い場所にいたって事だよな。本当に襲われなくて良かったよ。

リンドウを見ると、サクヤさんに説教されていた。十三歳に説教される十八歳って……。場所が場所だし、結構シユールだよな。

リンドウの説教はサクヤさんに任せて、俺はこの綺麗な花畑でも眺めとくか。この世界に来て八年間、まともに綺麗な景色なんて見た事無かったからな。

初めは、ゲームが面白いなんて理由で選んだのに後悔したな。今で

はそんな事ないけど。

てかさ、リンドウ達は気付いてないけど、さっきからアラガミの声が聞こえてるんだよなあ。一応能力使うか？

「蒼影どうしたの？」

「何もないさ。サクヤさんはリンドウの説教続けててくれ。」

「蒼影！頼むから止めてくれ！！」

「ヤダね、居住区の外はアラガミがいるの知ってるのに、一人で出て行ったんだ。実際俺も混ざりたいんだよ。」

「うう……。」

転生してからずっと幼なじみだったんだしな。心配するのも当然だ。

てか、何考えてたんだっけ？

ああ、アラガミが来たらだ。一応技能作成《スキルメイク》でいろいろと作ってるからな。焰手品《フレアマジック》を初めとした五ファイ手品なら、規模は小さいから目立たないし、丁度いいな。

ちなみに、五大手品ってのは焰手品《フレアマジック》、凍手品《アイスマジック》、雷手品《エレキマジック》、嵐手品《サイクロンマジック》、岩手品《ロックマジック》の五つだ。

これは、規模が小さく威力の大きいその属性の魔法を使えるようになるってのだ。

これを作ったのは、D・C・？の世界でマジックショーをみた時だったな。

グルル

.....。

「なあ、サクヤ何か聞こえなかったか？」

「聞こえたわね。」

「アラガミ.....。」

「「えっ!?!」」

目の前には、小型のアラガミ、『オウガテイル』が二体いた。

「逃げるぞ、サクヤ、蒼影。」

「先に逃げてくれない?流石に三人だと逃げきれないからさ、助け呼んで来てくれない?」

オウガテイルとの距離からして、逃げたらその音で気付くだろう。なら一人が囷になるべきだ。

「ふざけるな!お前が三人でって言ったんだろ!囷なら俺が.....。」

「駄目だよ。それに餓鬼が助け呼ぶより、リンドウみたいな年上が呼んだ方が信じるだろ?」

「駄目よ、蒼影!！」

まあ、俺は今八歳な訳だしな。普通に考えたら、任せれないよね。

「リンドウ、頼むって。俺、リンドウに勝った事あるし、大丈夫だつての。」

「……………、絶対だな。絶対に死なないんだな。」

「ああ、信じる。」

「わかった。」

「リンドウ!?何言ってるの!?!」

「行くぞ、サクヤ。」

リンドウはサクヤさんを連れて行った。信じて貰えて良かったな。普通は信じないんだろうからな。

サクヤさんの為にも、わざわざ俺を信じてサクヤさんを連れて行ってくれたリンドウの為にも、生きて帰るか。

「さて、観客はいないが、マジックショーの始まりだ!！」

転生、アラガミとの戦い？（後書き）

って事でGOD EATER編です。

「大丈夫なのかよ。」

D・C・?でも言ったけど、不定期にはなる。しかも原作までは時間がかかるぞ。

「まあ、頑張れ。」

分かってる。こんな小説を読んでくれる皆様ありがとうございます。

「感想やメッセージも待ってます。」

アラガミとの初バトル

リンドウside

俺は、蒼影とサクヤを連れて前見つけた小さな花畑に行った。あまりこつという事に興味の無い俺でも、綺麗と思ったから二人なら喜ぶと思った。

思った通り、二人は喜んでくれた。まあ、蒼影の一言……俺が一人で居住区から出てったという事を、蒼影が気付いたせいで俺はサクヤに説教された訳だが。

でも、説教が終わった後はサクヤも蒼影もその花畑を見ていた。

それに説教は面倒だけど、俺を心配してくれてた訳だし、その事は結構嬉しかった。

ちなみに、蒼影は説教の間も花畑を見ていたんだけどな。まあ、それでも心配はしてくれたみたいだ。

で、その後何かの声が聞こえたかと思うと、蒼影が呟いた。

「アラガミ……。」

見るとアラガミが二体いた。幸い気付かれてたいみたいだから、二人に声をかけた。

「逃げるぞ、サクヤ、蒼影。」

「先に逃げてくれない？流石に三人だと逃げきれないからさ、助け呼んで来てくれない？」

俺が声をかけると、蒼影は俺に言ってきた。

「ふざけるな！お前が三人でつて言っただろ！囷なら俺が……。」「蒼影が言ったのは、囷を買って出たようなものだ。それなら、こんな所に連れてきた俺がやるべき。そう思ったが……。」

「駄目だよ。それに餓鬼が助け呼ぶより、リンドウみたいな年上を呼んだ方が信じるだろ？」

「駄目よ、蒼影！！」

「リンドウ、頼むって。俺、リンドウに勝った事あるし、大丈夫だつての。」「

「……………、絶対だな。絶対に死なないんだな。」「

「ああ、信じる。」「

「わかった。」「

サクヤは止めようしていたが、蒼影の目は死ぬ気なんてまったくなく、何故か信じてみようと思った。

「リンドウ！？何言ってるの！？」

「行くぞ、サクヤ。」「

だから、サクヤを連れて逃げ出した。少しでも早く助けを呼ぶために。

助けと言っても何をしたいのかは、わからなかったが。

「リンドウ！蒼影が！」

「蒼影は死なないっていったんだ。信じて助けを。」

一番年上の俺が年下に任せるのは嫌だったが、実際蒼影は俺に勝った事もあった。

だから、サクヤの声を無視して信じる事と助けの事だけを考えて行動した。

今、俺に出来る事を考えて……。

蒼影 side

「ありやりや。なんかザイゴートいんじゃないん。」

確かオウガテイルの弱点は神だけど無いから他の属性しかないな。ザイゴートは神以外だから、焰手品《フレアマジック》、凍手品《アイスマジック》でいくか。

「凍手品！形成弓！」

凍手品を使用し、弓と矢を作り出す。体は八歳だから、遠距離で倒

すしかないからな。まあ、神機じゃなく倒れるかは分からないんだけど。

しかもオウガテイルはアラガミの原型であるにもかかわらず、近距離、遠距離、全方位への攻撃手段を持ち合わせているからな。たしか原作か漫画か忘れたが、ペイラーから「原型にして完成体」と評されてたような気がするな。

ザイゴートも面倒だな。

「っふ。」

まずはザイゴートを潰す。幸いザイゴートが行動する前に落とせたから、被害はない。後は、オウガテイル二体だな。

こんな事なら神系で作っておけばよかったな……………。

飛びかかってきたオウガテイルをよけ矢を打ち込む。

「燃えろっ!!」

この力で作った物は俺の自由に出来るから、打ち込んだ矢は消えずに残り、俺の言葉に反応して燃え上がった。体中に火がついたオウガテイルは、悲鳴？を上げながら倒れた。

後は一体。残ったオウガテイルはさっきの攻撃を見たからか、警戒してるみたいだった。

「警戒してるみたいだけどな、この矢の射撃範囲に入れば逃げきれないぞ!!」

分からないだろうけどオウガテイルに対して叫び、矢を放つ。警戒しても射撃範囲に入ってるオウガテイルは、逃げきれぬ訳もなく燃え上がった。

「ふう……、技能作成《スキルメイク》で作った力でも、アラガミを殺せるみたいだな。」

俺の周りには三体のアラガミの死体。他のアラガミにこの場所を荒らされないように、一応死体は完璧に燃やすか。

「焰手品、炎球。」

火を球体にして、死体に当てる。当たった死体は一瞬で燃え上がり、跡形もなく燃える。

そして残ったのは、リンドウの教えてくれた花畑と俺だけになった。花畑は壊さない様に気を使って闘ったしな。

「さて、リンドウとサクヤさんの所に帰るとしますか。」

助けを呼ばれてたら説明面倒だし、早めに帰りたいな。

「たっだいまー。」

「蒼影!?!」

居住区に戻ると、リンドウとサクヤさんが駆けてきた。

「蒼影、無事だったの!? 怪我は!?!」

「大丈夫だよ。心配かけてゴメン、サクヤさん、リンドウ。」

「悪い……、助けを呼べなくて。」

「別にいいさ。三人無事だった訳だしな」

「悪い……。」

「だから……。」

パンツ

「痛ってえ。」

リンドウと話していたら、サクヤさんに叩かれた。こつこつ時のビ
ンタって結構痛いよな。

「無事だったから良かったけど、死ぬかも知れなかったのよ!?!」

「……………」

「一番年下なのに、一人で……………」

俺を叩いたサクヤさんは泣いていた。原作では、リンドウがいなくなった時くらいしか見た事なかったな……………」

「ゴメン……………」

サクヤさんを泣かせたのは俺なんだし、何も反論出来ねえ。

「無事で……………よかった……………。本当に……………。心配したのよ……………」

サクヤさんは泣きながら俺も抱きしめた。

悪い事したな……………」

「もうしないからさ。泣き止んでくれよ。(ナデナデ)」

前の世界でもやってたように、泣いているサクヤさんの頭を撫でてみる。

年下に泣きながら抱き付いて、頭を撫でられてるって結構異様だな。

「あー、リンドウ助けてくれ。」

「知らねえよ。サクヤだってかなり心配してたんだ。自業自得と思つて受け入れな。」

はあ、心配されるのは嬉しいけど、泣かれるのはキツいな。

「頼むよ。」

「なあ、どうやって逃げてきたんだ？」

「何が？」

「アラガミからだよ。二体もいたんだし、隠れるならまだしも逃げ切るのは難しいだろ。」

「運だよ。偶然大型のアラガミが来てな。お陰でなんとか逃げきれたんだよ。」

これなら誤魔化せるかな？大型のアラガミが来る事なら実際にあるしな。まあ、大型のアラガミが来てで生き残れる事は、ほぼゼロに近いだろうけど、ゼロじゃないし大丈夫だろ。

「よく生き残れたな。まあ、俺達も蒼影のお陰で助かったんだし、もういいか。」

「リンドウ！そういう問題じゃないわよ！」

「サクヤも落ち着け。次からは無いようにさせればいいだろ。」

「えーと、次からは俺も気をつけるからさ、今回は許して欲しいんだけど……」

「絶対にしないって約束して。」

「わかったよ。」

まあ、いざという時はまたやるけど。出来るだけは約束って事で。

口にはしないけどな。

「無事に帰ってきたし、今回だけは許してあげるわ。」

「なら家に帰るっぜ。」

「そっね。」

「もうこんな事は遠慮したいな。」

アラガミと闘うとはいいんだけど、サクヤさんってか女の人に泣かれるのはキツイしな。

多分だけどリンドウとサクヤさんは原作通りゴッドイーターになるんだろうな。ツバキさんもそうだしな。

俺もゴッドイーターになって守れるようにならないとな。アラガミには神機が一番だろうし。

アラガミとの初バトル（後書き）

投稿ですが、二日に一回にします。

二日に一回は二作品でなので、どっちを更新するかは分かりませんが書き上げれば二作品投稿かもしれないけど。

「考えなしにするから、困るだろ。」

いやな、忙しくて書き上がらないんだよ。

「なんかそればかりじゃないか？」

まあ、そういう事で。

「感想やメッセージ待ってるんで。」

よろしく願います。

新型神機使い

あのアラガミの事件から五年経ち俺は十三歳になった。ちなみに、リンドウやツバキさんはすでにゴツドイーターになっていた。

ちなみに、サクヤさんは一年前に入隊していて、今はオペレーターをやってるみたいだ。原作では、二年オペレーターでゴツドイーターになったんだよな。

まあ、原作より入隊遅いような気もするんだけど、原作ではあまり書かれてないから、よく分からないんだよな。

そいえば、今居る原作キャラって誰だろうな。

ツバキさん、サクヤさん、リンドウあとリツカがいたよな。他は分かんねえや。

「面倒だな……、場所も分からないしな……。」

「何をしている。適性検査はどうした。」

「あ、ツバキさんっすか。丁度いい所に。」

「なんだ？」

「場所分らないから、教えてくれませんか？」

「……………まったく。」

なんか呆れられてるな。まあ当たり前か。

「なんかすいません。」

「こつちだ、早くついてこい。」

「ありがとうございます。」

「しかし、お前がゴッドイーター、しかも新型の候補になるとはな
」

「まあ、俺も守りたい人がいますからね。リンドウやサクヤさん、
ツバキさんもですね。」

バシッ

「思い上がるな、私はお前に守られるほど弱くない。もちろんリン
ドウもな。」

「痛い……。てか弱い、弱くない関係ないでしょ。戦場なら、お
互いに守り守られじゃないんすか？それにツバキさんは女性だし…
…。」

「まったく……。／＼／」

ん？なんか照れてるみたいだな。偏見だけどゴッドイーターは女性
扱いされなさそうだし、女性扱いに慣れてないとかか？

いや、流石にないな。

「まあ、いいや。そいえばさくはオペレーターとして働いてるんですよね？」

「ああ、後で挨拶しておくといい。いつも心配していたからな。」

そいえば、サクヤさんは休暇貰った時は会いに来てくれてたな。

「わかってますよ。ちなみに、ツバキさんはどうなんですか？」

「何がだ？」

「心配してくれてたんですか？」

「当たり前だ、お前はまだ子どもだからな。まあ、それ以外もあるが。」

そいえば俺十三歳だったな。てかそれ以外ってなんだ？

「ツバキさん、それ以外って？」

「聞こえていたのか。／＼お前にはまだ分かんたろうよ。」

……………もしかしてフラグ建ててた？夕紀の言う事には、フラグ体質なんて付けてたみたいだし……………。

いや、まさかなあ。

「で、まだですか？」

「……」

おお、いつの間にか着いてたみたいだな。

「ありがとうございますつと。んじゃ。」

中に入ると上から声が聞こえてきた。

「ようこそ……。人類最後の砦フェンリルへ……。今から対アラガミ討伐部隊『ゴッドイーター』としての適性試験を始める。」

演説で多くの人々を魅了するようか美声が円形の広い部屋に響き渡る。

この声はヨハネス・フォン・シックザール、ソーマの親だったよな。

この部屋の壁にはあちこちに傷や弾痕などがついている。神機でつけた傷なんだろうな。そして、この部屋の中央には台座が置かれていた。

普通ではなかなか目にしない光景に少し気圧されていると、ヨハネス……支部長から再び声をかける。

そいえばこの時期ヨハネスって支部長だったんだな。

「少しリラックスしたまえ。その方がいい結果が出やすい……。心の準備ができれば中央のケースの前に立ってくれ」

「了解」

そう答えて、部屋の中央へゆっくりと向かっていく。置かれている

ケースは上下半分に分かれており、それぞれに半円型の赤い物体がはめられていた。その物体がある場所は、あいだに置かれた剣の柄の部分……。

神機と腕輪だよな……。なんだかものすごく嫌な予感がするんだが……。恐れてても始まらないし、柄に手を伸ばす。

「ふう……………」

すると案の定、上の蓋がギロチンのように落ちてきて腕を挟んだ。

「ぐっ……………。ぐううっつ！！」

グチャグチャと嫌な音をたて、手首に堪えがたい激痛が走る。

ヤバいな、前の世界での闘いと同じかそれ以上だ。しかも久しぶりの痛みで、油断もしてたから声が出てしまう。

ケースの上蓋が開くと赤い腕輪をつけた自分の腕と、その手に柄をしつかりと握られた剣が出てきた。

やっぱり初めの装備は見た目も簡単だよな。と、そんな事を考えていると、柄のすぐ上にある黄色い物体から黒い触手が伸びてきて腕輪に刺さった。

気持ち悪いな。

「おめでとつ。君がこの支部初の新型ゴッドイーターだ」

ヨハネスの声が響く。どうやら終わったみたいだな。面倒だったな。

「次に、適性試験後のメディカルチェックが予定されている。後ろの扉から出て、指定された場所まで行って待機していてくれ。尚、『気分が悪い』など症状がでた場合は即座に申し上げるように。」

期待してるよ、波柳 蒼影君。」

「うつつす。」

原作通りなら、リンドウと同じように利用するつもりなんだろうけど、簡単にはいかさないぜ……。もちろんリンドウも殺させねえ。まあ、正確にはアラガミ化させないだな。

さてと、どうすつか。サクヤさんの所にも挨拶しに行くか。メディカルチェックもいつ行くかわからんし、ついでに聞けばいいや。さてとエントランスにいけばいいんだよな？原作ではエントランスだったし。

「あれ？見ない顔だね。新人君？」

後ろから声をかけられたから、後ろを見ると、白いタンクトップにゴーグルをした女の子がいた。

原作より幼いけどリツカだよな……。

「はい、今日から配属になりました。」

「ふーん。あ、もしかして新型の？」

「はい、一応新型神機使いです。」

「そっか、私は楠　リツカだよ。なにか分からない事あったら聞いてね。後、敬語は使わなくてもいいよ。」

「わかった。よろしくな、リツカ。」

「ふふっ、適応早いね。えっと……。」

「そいえば新型としか言っていなくて、名前は教えてなかったけな。」

「俺の名前言ってなかったな。俺は、波柳　蒼影だ。」

「改めてよろしくね、蒼影。そいえば、どこか行くところとしてなかった？」

「エントランスに行くところと思ったんだけど。」

「なら、私も行くつもりだったから、一緒に行くところか。」

「助かったよ、ありがとう。」

「原作キャラとも知り合いになれたし、今日は運が良かったな。リツカは原作でも好きだったしな。」

「でも、凄いやね。」

「何がだ？」

「だって、私より小さいのにゴッドイーターなんだから。」

「リックだつてここで働いてるんだろ？」

「私は整備班にいるけど、正式なメンバーじゃないからさ。それに、ゴッドイーターみたいに命の危険は少ないし。」

「でもさ、整備士がいないと神機の本格的な手入れは出来ないし。それに、正式じゃなくても神機の整備を出来るのは凄い事だと思うけど。」

実際に神機の整備がきちんとしてないと、いざという時に使えないかもしれないしな。神機はアラガミと闘う唯一の武器だしな。

「ふふっ、ありがとう、蒼影。」

「別に礼を言われる事はしてなくてね？」

「着いたよ。またね、蒼影。」

「あ、ああ。」

リックは俺に声をかけ、走っていった。結局なんで礼を言われたんだろう……………。

まあ、いいや。サクヤさんを探して挨拶とメデイカルチェックとかの事聞かないとな。

ついでにリンドウにも挨拶しないと。これからは先輩って事になるんだしな。まあ、リンドウとは友人みたいな感じだし、敬うつもりは全くないんだけどな。

新型神機使い（後書き）

ネタが無いー。

「いきなりなんだよ。」

後書きのネタがないんだよ！

「知るか、ボケ。」

ひどい……。

「てか、なんでもいんじゃないのか？」

なんかネタ無いと書けないだろ。

「そこは、ホラ、文才で……、いや、無いか。」

黙れ。ん……、アンケートでもするか？

「どうせ俺の能力かネタだろ？」

あと人気投票？まあ、お気に入り少ないし、感想や投票そんなにあると思わないけど。

「いや、感想はあるだろ。お気に入りには確かに少ないかも知れないけど、増やす方法なんて無いだろ？」

わからん。まあ、無期限で技能作成《スキルメイク》と話のネタや

リク募集するか？

「リク書けるのか？」

さあ？ただ参考には出来るし。

「はあ……………。読者の皆さん、よかったら感想、リク、ネタお願いします。」

よろしくお願いします。

支部長、榊博士との会話（前書き）

アンケートあります。

支部長、榊博士との会話

「久しぶり、サクヤさん。仕事どうですか？」

「蒼影、どうしてここに居るの？」

「そいえばサクヤさんやリンドウには新型の適合者になった事言っていなかったけな。二人共フェンリルで働いてるし、あまり会う機会無かったからな。会ってもわざわざ神機とかについて話したりしないしな。」

「えっと、実は新型の神機使いになったから。だから、サクヤさんとリンドウに挨拶するついでに聞きたい事があった。」

「新型！？じゃあ、今日配属されるっていう新人って、蒼影の事なの？」

「そういう事になる。」

「聞いてないわよ……。そういう事はきちんと伝えてよね。」

「あー、機会が無かったしな。」

「リンドウには伝えたの？後、聞きたい事ってなにかしら？」

「リンドウにも伝えてないよ。てか、サクヤさんの方が会いに来てるわけだし、サクヤさん知らないのにリンドウが知るわけ無いから。聞きたい事ってのは、メディカルチェックやらの事だよ。」

「まったく、まあいいわ。えっと、今後の予定はメディカルチエツクを受けた後、基礎体力の強化、戦術理論の習得、各種兵装の扱いなどのカリキュラムみたいね。」

「……面倒だな。」

てか俺から聞いたけど、サクヤさんが知ってるんだ。こういうの原作のツバキさんみたいな教官系の人が知ってるもんだと思った。

「そう言わないの。榊博士の研究室に一五　までに行くようにね。それまでこの支部を見回ってたらず？今日からお世話になるんだし、挨拶の一つでもしておいたらいいわよ。」

「了解。」

てか榊博士ももういるんだ。まあ、ヨハネスがいるわけだし、いてもおかしくないか。

「確か榊博士の研究所はラボラトリにあつたよな。」

エレベーターに乗って榊博士の研究所を目指す。その間他のゴッドイーターの視線が珍しそうに見てくるから、ウザくてウザくて。

この支部初の新型だからか、俺の年のせいかわからないけど、こんなに見なくてもよくないか？

コンコン

「波柳蒼影です。」

ノックがいるのかは知らないけど、一応ノックをしておく。

「入っていいよ。」

許可を貰ったし、中に入るか。

中に入ると、機械やコードがそこら中にあり、その中で忙しそうにキーボードを叩いている狐目の男と、白いロングコートを着た男がいた。

ペイラー榊とヨハネス・フォン・シックザールがだよな……。

「ふむ……、予想より862秒はやい……、よく来たね、波柳 蒼影君。私はペイラー榊。アラガミ技術開発の統括責任者だ。」

自己紹介の時くらい指止めるよな……。まあ、別にこんなキャラなのは分かってるけど、知らなかったらかなりムカついてたな。

「さてと……、見ての分かんと思うけど、まだ準備中なんだ。ヨハン、先に君の用事を済ませたらどうだい？」

榊博士はそう言って支部長を見る。

「榊博士……、そろそろ、公私のけじめを覚えていただきたい。

先程の適合テストではご苦労だった……、私の名はヨハネス・フォン・シックザール。この地域一帯のフェンリル支部を統括している。さて、我々フェンリルの目標を改めて説明しよう。君に課せられた責務は、この地域周辺のアラガミの撃退とその素材を持ち帰ることだ。そしてそれらは全てここ……、前線基地の維持と、来るべきエイジス計画の資源として使われる。」

「この数値はっ……!!」

突然榊博士の声が横から割ってきて説明が中断される。少し驚いて榊博士の方を見る。

何か怖いな。まあいい、今は話を聞かないと。

「エイジス計画……、って確か外部居住区のメディアでもよく取り上げられているあの計画だよな。」

ヤベ、ついタメ口出てしまった。まあ支部長は表面上気にしてないし、別に大丈夫か。

「そう……、人類の楽園を作るという理念のもとに進められている計画だ。」

正確には、旧日本海付近に外部居住区のものとは比べものにならないほど強固な、対アラガミ装甲を展開した人工の島を作り、そこに人々を住まわせるというものだ。」

「ほほ……!!」

また榊博士の声が割って入るが、支部長は無視する。

よくあの声は無視できるよな。結構でかい声なんだけどな。

「この計画が成就すれば……、少なくとも人類は当面の間、絶滅の危機を遠ざけることが出来るはずだ。」

「すごいっ！！！！これが新型かぁー！！！」

「ペイラー……、説明の邪魔だ。」

ついに堪えられなくなったのか支部長がが榊博士に注意する。

よくここまで耐えたと誉めてやりたい。何様かって話だけどな。

「ああ、ゴメンゴメン！ちょっと予想以上の数値に舞い上がっちゃったんだよー。」

榊博士の様子にため息を漏らしている支部長。

……… やっぱり、支部長って苦労してるんだな。アーク計画の一部には、榊博士に対してのストレスあるんじゃないの？

榊の様子にため息を漏らすシクザール。

「ともあれ、人類のためだ。尽力してくれ。では、私はこれで失礼する。ペイラーは検査が終わったら、私にデータを送っておいてくれ。」

支部長はそう言って、部屋を出て行った。

「よし！準備は完了だ。そのベッドに横になってくれ。少し眠くなるけど心配はいらない。」

次に目が覚めたときは自分の部屋だ。戦士のつかの間の休息というやつだね。予定では10800秒だ。ゆっくりおやすみ」

何されるんだろうと……。少し……。いやかなり不安なんだけどしょ

うがない。横になると、検査が始まった。

榊 side

眠った蒼影君を部屋へ送った後、自分専用のターミナルにアクセスし、ハイドの計測データを見る。

ふむ……、ただでさえ適合しにくい新型神機に選ばれ、なおかつソーマ以上の適合率の高さ……、間違いないなく即戦力となる逸材だね……。

現在世界に新型神機使いは数えるほどしかない。その中でも蒼影君の潜在能力の高さは群を抜けるね。

「指導方法や成長次第では世界最強のゴッドイーターになるかもしれないな……。」

比較的の不味いコーヒーを飲みながら呟く。

これから蒼影君はいろいろな思惑に巻き込まれるんだろうね。

蒼影 side

目が覚めたら、部屋のベットにいた。ここは俺の部屋になるのか？

結構綺麗な部屋だし、外部居住区とはかなり違うな。やっぱりフェンリルは凄いな。

「そいえば、検査あったはずだよな。特に傷とかないし、どんな検査だったんだろう?」

まあ、いい。まずは服を着替えるとするか。

俺の服は原作で言うスーパーノワールだ。黒色は結構気に入ってるからな。本来はフェンリルから支給されてるの着るんだろうけど、こっちの方が気に入ってるしな。

他のゴツドイーターもそれぞれ違う服着てるし、大丈夫だろ。

なんか着にくいな。……………。

「あああ!!腕輪邪魔だつての!!」

俺の右腕に付いている無骨な腕輪が、服に引っかかって着にくい!!

「通れっ!!」

はあ、なんとか通ったな。訓練用のミッションでも受けるか……。そいえば、訓練用のミッションって誰が担当するんだろうな。

「サクヤさん、訓練用のミッションを受注したいんだけど。」

「分かったわ。ツバキさんが用意したミッションが届いてるわ。準備が出来たら出撃ゲートから案内表示の指示に従って第一訓練場へ

移動して。」

「了解。」

「ミッションの受注や報酬の受け渡しなどは私が行うから、これから関わる事は多いと思うわ。よろしくね。」

「ああ、てか関わるのはそんなん関係ないけどね。幼なじみだしさ。」

「そうだったわね。訓練頑張った。」

今、サクヤさんなんて言った？

ツバキさんが用意した……………？もしかしてツバキさんが担当なのか？
うわぁ……………。嫌だな、原作でも鬼教官なんて言われてたし厳しいだろうな。

まあ、頑張るか……………。

支部長、榊博士との会話（後書き）

「最近こっちしか更新してくないか？というか、俺の出番は？」

リンドウは原作で出るしいいじゃん。という事でG O D E A T E
Rからリンドウに来てもらいました。

「ったく、で？なにかあるんだろ？」

ああ、原作前にロシア編やるつもりなんだけど、ダニエラと大車ど
うしようかと。

まあ、ここでアリサの洗脳といて、オレーシャを殺させないように
するんだよ。で、オレーシャとリディアは極東支部にアリサと行く
んだけど、ダニエラをハーレムに入れるかってのが一つ。

「だけだよ、今も捌けてないじゃねえか。」

まあ、そうなんだけどさ。で、二つ目が大車にはロシアで退場願
うかと。

「なんでだ？」

だって、アリサの洗脳といたって、大車いたらまた薬で洗脳される
じゃん。後、ウザイ。

だから、ダニエラと大車をどうするかアンケート取るうかと。

「なるほどな。俺からも協力頼むわ。」

期限はロシア編始まるまでかな？

よろしくお願いします。後、技能作成の方も何かあったらお願いします。

「んじゃ、俺はデートだから。」

頑張れよ。

訓練

えっと、こつちだな。原作では見えなかった所も見えるし、面白いな。

スツという音と共に扉が開く。中は適合テストを行った場所と似ていた。その中央には、ツバキさんがいた。

「ツバキさんが担当なんですね。仕事大丈夫なんですか？」

「お前が気にする事ではない。それに、私はそろそろ引退するからな。」

ツバキさんって、この時期に引退するんだな。

「引退つすか……、一緒にミッション行くのは無理なんですね。」

「そういう事になるな。まあいいだろう。早速トレーニングを開始するが、その前にまず簡単な説明をしよう。お前やその他の者達、現役を引退したゴッドイーターまで、皆腕輪からオラクル細胞を投与している。オラクル細胞についての詳しい説明は、近いうちに榊博士が講義を行うのだから、そこで学ぶように。そしてそのオラクル細胞は、人体への投与に成功すれば、身体能力を爆発的に引き上げてくれる。筋肉の瞬発力や持続力、反射神経や動態視力、聴力など身体中のほぼ全ての器官が強化される。よってそれに比例したトレーニングメニューとなるのでそのつもりでな。」

「マジかよ……。」

比例したトレーニングって、絶対に量多いよな。しかも小さい時から俺を知ってるし、身体能力が高いの計算してトレーニングさせろうだな。

「一応言っておくが、お前は他のゴッドイーターよりも厳しいからな。」

「マジすか？」

「当たり前だ。どうせお前も分かっていたのだろう。」

「まあ……。」

「なら、まずは腕立て、腹筋、背筋を2500だ。」

「……………桁おかしくないか？しかもまずはってなんだよ。」

「それが終われば、神機を使っただけの訓練や反射神経を鍛えるから、覚悟しておけ。」

「仕事は……………」

「さつきも言っただろう。それに、私達を守るんだろう？なら、これくらいこなして見せる。」

初めの方はツバキさんにしては珍しくニヤニヤしながら言っていたが、最後の方は真剣になっていた。

「わかりましたよ。」

守るって言ったし、こんな事で弱音を吐くわけにはいかないよな。

「ハアハア、もうヤバい……。」

転生する時少し体力落ちるし、最近ほとんど鍛えてなかったからな……。他にも2500なんて連続でやってない、ってのもあるんだらうけどな。

「よし、次に行くぞ。」

「少し休憩を。」

「駄目だ、お前は一人で近距離、遠距離とこなす事が出来る新型の神機使いに選ばれたんだ。新型は戦闘中に神機の変形を行いながら戦う。だが、この支部には新型がない。そのため、神機を使いこなすためには自らでなんとかしなければならぬ。」

「まあ、新型は今ほとんどいないし、旧型とは戦い方も違いますね。」

実際、新型がいればチームの状況に合わせる事も出来るし、一人で戦う時も旧型よりは戦いやすいな。

「さらに、剣、銃、装甲、それぞれ三種類で計九種類の兵装を扱うため、他の神機使いより新型の神機使いにかかる負担は大きい。

そのため、お前は他の神機使いより覚える事やしななければならない事が山ほどあるんだ。」

「確かにせっかくの新型なのに、いつまでも戦場に出ないんじゃない意味ないですしね。」

それにいつまでも戦場に出ないなんて、俺は嫌だしな。

「分かっているだろうが、この極東支部の連中は、新型神機使いを見たことがない……。その分お前にかかる期待も大きくなるはずだ。」

「わかっています。俺が努力をして他の人の負担が軽くなるなら、俺に負担がかかるのはいいし、覚悟もしていますよ。」

昔、アラガミに襲われた時に覚悟はしたしな。それに他の世界でも似たような事はあったからな。

「なら、早速続きをするぞ。まずは、近距離攻撃、兵装の切り替え、遠距離攻撃だ。」

「了解。」

さてと、とつとと訓練を終わらして、神機を使いこなせるよいにしますか。

「今日はここまでだ。明日からは、実戦も入るから覚悟しておけよ。」

「了……………解……………」

「はあ……………。今日はもう休め。本来なら一週間ほどに分けるのを一日でやったのだからな。」

「はあ！？何でそんな事を……………」

「お前が思ったよりもついてきたからな。ついやりすぎてしまった。」

「……………」

鬼……………。この時から鬼教官だったんだな……………。訓練だったのに、普通に神機使って撃ってきたからな！おかしいだろ！人間相手に神機使うか！？

反射神経鍛えるとか一歩間違ったら死んでたぞ！？

「ああ、明日はリンドウと共にミッションに行ってもらっからな。」

「わかりました……。じゃあ上がりますね……。」

「ああ、そうだ。今まで見てきた神機使いの中ではいい動きをしていたぞ。」

「ありがとうございます……ごじます。」

ツバキさんが誉めるのって珍しいな……。

てか、入隊してすぐに実戦ってどうなんだろうな。やっぱり新型って事もあって、早めに実戦に出したいんだろうな。

他にもツバキさんが一日で特訓終わらしたってのもあるんだろうけどな。

「あれ？蒼影、疲れてるみたいだね。」

「蒼影どうかしたの？」

「リックにサクヤさん……。訓練が……。」

「ツバキさんの訓練ね。でも、一週間くらいでやるんじゃないの？」

「多分だけど、一日目はそんなにやらないんじゃないかな？他のゴッドイーターもそうだよね、サクヤさん。」

「そうよ、そんなに疲れるとは思わないけど。」

あ、やっぱり他はもっと楽なんだ。

「ツバキさんが一日でやらせたんだよ。明日から実戦だって。」

「そいえば、蒼影は昔からツバキさんに気に入られてたからね。」

「大変だったんだね。あ、訓練終わったんなら、何か神機であった？」

「特にはなかったよ。実際に使ってなにかあったら、リツカに言うよ。」

「うん、神機なら私に任せてよ。」

「蒼影、今日はもう休んだら？」

「そうするよ。じゃあ、また。リツカ、サクヤさん。」

とつと部屋に戻って寝て体を休ませるか。明日からは実戦だし、疲れで動けなかったらシャレにならないしな。

「見ない顔だな、ジーナ知ってるか？」

「知らないわ。」

「確か今日から配属になった新型ではないか？」

あれは……ジーナとタツミ、ブレンダンか？

「今日から配属になりました波柳 蒼影です。」

「あなたが、今日配属された新型だったのね。」

「なるほどな！俺は大森 タツミだ。まあ、最初のうちは無理せず
に仲間を頼っていいからな！」

「俺はブレンダンだ。ブレンダン・バーデル。よろしく。」

「ジーナ・ディキンソンよ。お互い頑張りましょう？」

この三人ってこの時期からいたのか？正直いついたとか原作にない
からな……。

「よろしくお願いします。」

「ああ、別に敬語なんて使わなくていいぞ。」

「わかった。」

「蒼影はいつから任務に出るんだ？」

どうなんだろう？明日は実戦だけど、訓練なんだよな……。でも一
応任務って事になるのか？

「一応実戦は明日かららしい。」

「明日からか。大丈夫か？」

「はい、覚悟はしてますから。」

「なら、俺から言う事はない。なにかあったらいつでも力になる。」

ではな。」

ブレンダンはそう言って去っていった。やっぱりブレンダンって冷静だよな。

「待てよ、ブレンダン！またな、蒼影！」

タツミもかよ。てか三人共任務から帰ってきたばかりだったのか？

「まったく男どもは……。蒼影だったわよね、帰るところを止めて悪かったわ。」

「いえ、これからよろしくお願いします、ジーナさん。」

「私も敬語はいらないわ。」

「わかった。じゃあ、もし一緒に出る事があつたらよろしく。」

「ええ、よろしくね。」

ジーナと会話を交わして戻る。やっと休めるな。

訓練（後書き）

なあ。

「なんだ？」

どうしたら、面白くなるかな？

「知るか！」

いやさ、D・C・？もだけど、お気に入り百が限界だと思うんだよな。後、感想。

「いや、才能じゃないか？」

だよなあ。まあ、趣味だし別にいいけど、やっぱりいろいろ感想欲しかったり、せっかくならいろんな人に読んで欲しいよな。

「まあ、わからなくもないけどさ。」

まあ、いいや。今は見てくれてる人の為、自分の為に頑張るか。

「そうしろ。」

じゃ、次回も読んでください。

ゴッドイーターとしての初実戦

「ん……、朝か？」

時間は………、まだ大丈夫だな。まあ、目が覚めたしエントランスに行くか。

「……………なんか人少ないな。」

朝だからか？いや、朝だからってこんなに少ない筈ないよな。

「蒼影じゃない。こんな朝早くからどうしたの？」

エントランスに着くと、オペレーターの仕事をしているサクヤさんを見つけた。やっぱりオペレーターって忙しいのか？

「目が覚めたから、誰かいないかと思ってきたんだよ。一人でいても暇なだけだしな。」

「そう、私でよかつたら相手になるわよ。今は人も少ないから。」

「サンキユ。」

あ、そいえばこの世界でも時計作ってるし、サクヤさんに渡してどうかな？一応金属は前の世界でかなり買い溜めしてたから、この世界でも作れたんだよな。一応は原作キャラ+予備をいくつか作ってる。

「ねえ、蒼影。今日リンドウと行くのよね？」

「そうだけど？」

「昨日リンドウには言ったの？」

「いや、面倒だし。あ、そうだ。これサクヤさんに。」

「これ……時計？でも、どうして。」

「趣味かな。前から考えてて、仲良い人には渡すつもりだったんだよ。ちなみに男女でデザインは違うから。後、裏に名前彫ってるから。」

「ありがとう、でもよく素材入ったわね。」

「まあね。」

「大事に使うわね。」

サクヤさんの笑顔が綺麗だ。やっぱり好きな人からのプレゼントは嬉しい物なのかな？

ん？気付いてるのかって？

当たり前だろ。二つの世界を生きて複数の人から好意を持たれてたし、付き合った後とかは嫌われなくなかったし、人の気持ちは大分分かるようになるしな。

ちなみに、この世界は一夫多妻はアリらしい。といっても、許可されるのは養えるだけの力がある人だけだが。

だから、ゴッドイーターやフェンリルで働いてる人間くらいしかないんだけど。ゴッドイーターで複数の人と付き合った人は少ない。理由はいつ死ぬかも分からないから、悲しませないためってのが多いみたいだな。

まったく無い訳ではないらしいけど。今でも他の支部に居るっての聞いた事がある。

「おはよう、サクヤさん、蒼影。」

「あ、ジーナ。今日はどうしたの?」

「リンドウさんに言われて新型のミッションについて行く事になったわ。」

ジーナか……、流石にまだ渡せないな。昨日知り合ったのに渡したらおかしいからな。今渡せるのは、リンドウ、サクヤさん、ツバキさんくらいか。

「なんかスマン。」

「肝心のリンドウはまだ来てないのね。」

「さっき会ったからもうすぐ来ると思うわ。」

相変わらずだな、リンドウは。てか、いつからなんだ?

「なあ、ジーナ。俺っていつミッションに行くんだ?」

「リンドウさんが来たら、すぐに行くわ。」

「うーす、待たせたな。んで、新型は……、あ？蒼影じゃねえか。何でこんな所にいんだよ。」

「ふふっ、リンドウの言う新型が蒼影よ。」

「は？マジで蒼影が？」

驚いてるな。サクヤさんやジーナなんか少し笑ってるよ。

やっぱり内緒にしててよかったな。リンドウのこんな表情を見るとは思わなかったよ。

「まさか、蒼影がねえ……。まあ、いいか。なら、早速行くぞ。サクヤ、ミッション頼むな。」

「分かってるわ。頑張ってるね、蒼影、ジーナ。」

神機保管庫エリアに移動し、俺の神機が納められたケースを持って、ヘリに飛び乗る。俺は一応新人だし、オウガテイルが相手だろうな。

さほど時間はかからずに俺達の乗ったヘリは任務の場所である「贖罪の街」へと到着した。

昔は人が生活していた大都市だったんだろうけど、アラガミの出現直後に崩壊し、無惨に食い破られたビル郡が今も残っているな。

「ここも随分荒れちまったな……。んじゃ、蒼影。実施演習を始めるぞ。…命令は三つ。」

命令という単語を聞いて、小さい時から一緒に過ごしていたからなんか笑えるな。

「死ぬな。死にそうになったら逃げる。そんで隠れる。運が良ければ不意をついてぶつ殺せ。……あ、これじゃ四つか……。」

リンドウの数え間違い……。いやわざとかな？まあ、思わず吹き出してしまった。こちらを見てリンドウは微笑む。

「そうそう、肩の力を抜いてな。とにかく生き延びることだけを考える。生きてさえいりゃ、あとは万事どうにでもなる」

「分かってるさ。一応言っておくけど、リンドウも必ず生き残れよ。後、何かあっても一人で残って囷とかなるなよ。」

原作のセリフだし好きだけど、なんか悔しかったし少し空気を壊してやった。

「はは、分かってるぞ。」

「んじゃ、どうする？俺が出て危なくなったらフォローっすか？」

「私はそれでいいわ。」

「なら、それで行くぞ。蒼影頑張れ。」

いたな……。今回の討伐対象のアラガミ、オウガテイルが二体目の前の広場を歩いている。いきなり二体かよ……。

オウガテイルからは建物の影になっていて、こっちには気付いてないみたいだな。

「ならっ！」

物影から飛び出し、手前にいるオウガテイルを数回斬りつける。怯み倒れたオウガテイルを無視し、もう一体を斬りつける。

そして、一度離れ銃に切り替え神属性の弾丸を撃ち込む。OPが無くなると、再び近づき斬り込む。そして一体倒し、二体目を倒そうとする。

っ！？

後ろから放たれたレーザーを横に転がり避ける。

「ったく、何だよ!？」

レーザーが撃たれた場所を見ると、小型のアラガミ、ザイゴートがいた。

おいおい、オウガテイルだけじゃないわけ?いきなりイレギュラー

かよな。まあ、いい。とつとと倒すか！

まずはザイゴートに向かって走り、毒ガスやタツクルをされる前に空中で斬りつけ、ザイゴートを地面に落とす。

そして、神機に集中すると、神機から黒い口のような物が出てくる。神機の補喰形態《プレデターフォーム》だ。そして落ちたザイゴートを補喰し、バースト状態になる。

補喰で手に入れたアラガミバレットを使い、オウガテイルを倒す。そして、再び浮かび上がるうとしたザイゴートを斬りつけ倒す。

「ふう……。」

「凄いわね、新人と思えないわ。」

「ありがとう、ジーナ。俺は役に立ちそうか？」

「ええ。」

「俺達の出番は無かったみたいだな。ザイゴートが来た時は心配したが、無用だったみたいだな。」

「まあ、ツバキさんの訓練が厳しかったから。」

「姉上か……。災難だったな。まあ、次から一人でも大丈夫なんじゃないか？」

「俺がわかるかよ。」

「んじゃ、帰って報告するか。」

「了解。報告は任せたリンドウ。」

「何だよ。まあ、イレギュラーにもきちんと対応したし、これくらいはいいか。」

「サンキュー。ジーナも行くぞぜ。」

「ええ。」

帰りのへりに乗り込み、アナグラへと戻る。まだ三日も経ってないのにかなり疲れたな。

「疲れた……。」「

「初めての実戦はどうだった？」

「いきなりイレギュラーがあって疲れたよ。」

「何があったの？」「

「蒼影が戦ってる時に、ザイゴートが来たんだよ。」

「そうなの、大丈夫だったのよね？」

「ああ。俺達が何かをする前に一人で片付けてたしな。」

「流石、蒼影ね。新人はオウガテイルにも苦戦する事があるのに。」

やっぱり新人はオウガテイルにも苦戦するんだな。まあ、初めての
実戦で訓練と同じように行動出来る訳ないか。

「期待の新人だな。これから頼むぞ、蒼影。」

「分かってるよ。」

「蒼影、今日は特にする事無いはずだから、休んでたら？多分明日
からは、普通にミッションに行くと思うわよ。今日の事で、実力は
問題ないと見なされると思うわ。」

「なら、休むとするよ。」

あー、リツカの所に行って神機の調整してもらわないとな。……
明日でいいか。

ゴッドイーターとしての初実戦（後書き）

「なあ。」

ん？どうした？

「戦い短くないか？」

まあ、戦闘描写苦手だし。少しずつ長くしたいと思っただけ。

「上手くなるのか？」

知らね。まあ、なんとかなるぞ。

「まあ、頑張れ。」

ああ。んじゃ、今回はこの辺で。

神機

「蒼影、起きてる？」

この声はリツカか？

「ん……、今な……。なんか用か？」

「少しね、神機の事だね。なんでか私がツバキさんに頼まれちゃってね。」

ツバキさんが？この頃からリツカは信用されてたんだな。年が近いってのも有るのかもしれないけど。

ともかく、直ぐに着替えないな。待たせるわけにはいかないし。

「少し待ってくれ。すぐに着替えるから。」

「ゴメンね。」

「いや、俺も行くつもりだったし、ちょうどいいや。」

「そうなんだ。」

さて、着替えるか。……やっぱり腕輪邪魔だよな。服着る時とか本当邪魔だし。誰か改良してくれればいいのにな。

「悪い、待たせたな。」

「別にいいよ。じゃあ、行くうか。」

「ああ。」

「ねえ、昨日ミッションに行ったみたいだけど、ないか違和感や不具合とかあった？」

「いや、特にはなかったな。結構使いやすかったし。」

「そっか、ならよかったよ。そうだ、リンドウさん達に聞いたよ。」

「聞いた？リンドウ達何言ってたんだ？」

「ん？蒼影が初ミッションでオウガテイル二体とイレギュラーのザイゴート一体を一人で倒したって。結構話してたよ。」

……あいつ何言ってたよ。わざわざ言い触らす事でもないだろうに。しかも、リンドウってこんな事わざわざ言ったりするキャラだったか？

「そこまで広まってるのか？」

「うーん、そうだね。やつぱり、新人がいきなり二体のオウガテイルと一体のザイゴート計三体も倒したんだから。」

「それってありえないのか？」

「そうだよ。基本的に一緒に行く先輩のゴットイーターに、手伝わってもらいながらだったりするからね。」

そうだったんだな……。でも、その割にはリンドウやジーナが手伝う気配なかったような気がするけど……。

「それだけで結構広まるんだな。」

「後は蒼影が新型って事もあるんだと思うよ。この支部で初めての新型だから、その分期待があるんだと思うよ。」

「なるほどね……。面倒だな……。」

「これかも大変だと思うよ。」

「なんでだ？」

「初めてのミッションで一人で三体倒したからだぜ。」

後ろから、リツカ以外の声が聞こえた。後ろを振り向いてみると、後ろには昨日一緒にミッションにいったジーナと、タツミがいた。さっきの声はタツミだったみたいだな。

「ジーナとリンドウさんから聞いたぞ。いきなり活躍したみたいだな、蒼影。」

「そうでもないって。まだまだ強いアラガミはいるんだし。」

「それでも、少しは胸を張ってもいいと思うわ。」

「ありがと、ジーナ。そいえば二人はどうして？」

「俺は今からミッションにな。」

「なら、早く行かなくていいのか？」

「今回は討伐だからな。まあ、もう行かないといけないから行くわ。じゃあな、お互い頑張ろうな。」

そう言いタツミは走って行った。走るくらいなら、初めからこんな所で油売らなかつたらいいのに。ん？一緒に居たのにタツミだけって事は、ジーナは違うようなんだな。

「ジーナはどうしたの？」

「私は神機のメンテナンスよ。」

そいえば、リツカって原作キャラはリンドウとサクヤさん、ツバキさん以外呼び捨てなのか？まあ、原作とは違うわけだし、別にいいけど。

「なら、一緒に行こうか。私も蒼影も行く途中だったから。」

「ええ。」

「そいえば、さっきタツミが言ったのってどう言うことだ？」

「簡単よ。初めのミッションでいい結果を出してたら、後からの期待が大きくなるのよ。」

「あー、なるほどね。まあ、それなりにはこなすさ。俺だって遊びでゴッドイーターになったわけじゃないんだからさ。」

「蒼影って何でゴツドイーターになったの？」

「私も知りたいわ。」

ジーナってそんなに他人を気にするタイプだったけな？まあ、いいか。

「そうだな……。俺さ、リンドウとサクヤさんと幼馴染みでさ。」

幼馴染みって、子供のころに親しくしていた人の事だし、合ってるよな？

「だから、リンドウさんの事を呼び捨てなのね。」

「でも、サクヤさんはさん付けてるよね？」

「それは何となくな。で、話は戻すけど。俺が九歳の時かな？居住区から出てな。その時にアラガミに見つかってな。」

「よく生きてたわね。」

「蒼影の運がよっぽどいいんだね。」

「かもな。で、その時に俺が自分から囿になつてな。なんとか生きてたけど、その後サクヤさんに泣かれてな。その時に、誰かを犠牲にしなくても守れる力が欲しくてな。」

技能作成《スキルメイク》を使えば、倒せるけど、人前で簡単に使う訳にはいかないからな。ちゃんと使える力を入れたかったんだよな。

「困って……。九歳の時から無茶してたんだね。」

「信じられないわね。」

「リックカ、からってなんだよ。」

「だって、初ミッションでいきなり一人で、アラガミ三体と戦うだからね。」

確かにさっき聞いた限りでは、一体でも先輩ゴッドイーターと戦うみたいだし……。……。確かに無茶だな。

「まあ、いいや。俺がゴッドイーターになった理由は、これくらいだな。」

「蒼影、話してくれてありがとう。」

「リックカ、蒼影、着いたわよ。私は行くわね。」

「ああ、じゃあな。」

「またね、ジーナ。」

「さて、蒼影行こうか。」

リックカに着いていくと、他の整備士達が居た。原作ではまったく見ない光景だし、結構面白いな。てか、リックカって結構慕われてるみたいだな。

「じゃあ、一応神機を試してみるね。」

「ああ、てか、リツカがやるんだな。」

「まあね、これでもある程度は分かるしね。」

リツカって正式にはまだ配属されていないんだよ……。俺的には、仲のいい人がやってくれるんなら話しやすくもいいけど。

「そうだ、蒼影はそれぞれの武器の特徴とか聞いた？」

「いや……。」

種類は分かるけど、リツカが言ってるのとは違うしな。剣形態《ブレイドフォーム》がロング、シオート、バスターで、銃形態《ガンフォーム》はブラスト、アサルト、スナイパーってのしかわからないしな。

「なら、少し説明しておこうか。これから役に立つかもしれないからさ。」

「頼むよ。」

「なら、剣形態からだね。これには、シオートブレイド、ロングブレイド、バスターブレイドがあるんだ。」

「それくらいなら分かるけど……。」

「そうなんだ。なら、それぞれの特徴ね。シオートブレイドは、攻撃速度と回避性能が高く強襲離脱が自由自在だけど、攻撃力は控え

めに設定されているの。次に、ロングブレード。これは、攻撃力、範囲、速度に他2種の平均的な値を持ち、「インパルスエッジ」と呼ばれる剣形態のまま、銃撃を行うという特殊な攻撃が使うことができるんだよ。インパルスエッジで放たれるバレットは、それぞれ異なるんだけどね。最後にバスターブレード。これは、最高の攻撃力と攻撃範囲を持つが、鈍重なため回避性能は控えめだね。」

やっぱり凄いな。何も見ないでスラスラと言ってるし。

「なら、スピードがバランス、パワーって事か。」

「そうだね。次に銃形態だけど、この種類は分かる？」

「ああ、ブラスト、アサルト、スナイパーだろ？」

「そうだよ。これは、オラクル細胞を高エネルギー状態にしたものを飛ばすことで攻撃するんだよ。短く中距離までの使用に適し連射能力に優れるアサルトタイプ、連射速度は遅いけど放射・爆発系の銃弾の効果が高まるブラストタイプ、ブラストタイプと同じで連射には向かないけど、レーザー・貫通系銃弾の運用に長けた「スナイパータイプ」の3種類の銃身があるんだよ。各種バレットを使い分けて様々な属性の攻撃が可能だよ。」

「よく覚えてるな……。」

整備士ってここまで覚えてるんだな。ほんと、ゴッドイーターとか整備士が居なかったら、ヤバイんだろうな。

「少しは仕事もやってるし、好きでやってるからね。私達がちゃんとする事で、神機使いの生存率が少しでも上がるなら嬉しいしね。」

「流石だな。」

「そんな事ないよ。それより、終わったみたいだよ。」

「早くないか？」

「うーん、結構喋ってたし、問題も無かったみたいだからね。」

「そっか、なら良かったよ。」

「私はまだやる事とかあるから、またね。」

「ああ、仕事頑張れよ。」

今からどうするかな……。……。エントランスにでも行って暇つぶしでもしておくか。

「蒼影、ここに居たのか。」

「ツバキさん？どうかしたんですか？」

「お前に伝えておかないといけない事があってな。」

「伝えておく事ってなんですか？」

「お前は明日から、ゴッドイーターとして任務にあたってもらう。」

明日から？ミッションなら昨日も行ったはずだけど……。もしかしたら訓練じゃなくなってる事か？

「どじいつ事ですか？」

「昨日のミッションの成果をみて、ちゃんと働けるだろうつとこと事になってな。」

「なるほど……。」

新型のデータが欲しいのか？まあ、どうでもいいけど。

「しかし、こんな短期間ではな。」

「やっぱり、おかしいんすか？」

「当たり前だ。」

「ふーん、まあ、どうでもいいけど。あ、ツバキさん。」

「何だ？」

「働きすぎて体壊さないでくださいよ。」

「お前に心配される事ではない。」

「いやいや、一応小さい時から知ってるんだし、心配くらいはするだろつ。」

「ツバキさんは女性なんですから。」

「っ！！何を言っているんだ。／／／／／」

……珍しい表情だな。やっぱり女性扱いなれてない見たいだな。

「事実じゃないですか。まあ、俺は行きますね。」

「早く行け。」

起こられる前に退散しないと。

「まったく、この女たらしが……。」

なんか聞こえた気がするけど、無視だな。てか、ツバキさんにもフラグっぽい？あの人結構分かりにくいからな……。

「あ、蒼影。」

「おはよーっす、サクヤさん。」

「蒼影明日からミッションに行くのって本当なの？」

「もう聞いてるんだ。さっきツバキさんに会って聞いたから、本当らしいよ。」

「もうなんて、早いよね。」

やっぱり誰から見ても早いみたいだな。俺的にはそうは思わないんだけどな。あー、そいえばソーマと会ってないな。出来たらソーマとは仲良くなっておきたいんだけどな。原作でも結構孤独みたいだったし、少しでも軽く出来るならしときたいしな。まあ、そんなに簡単にいくとは思って無いけどさ。

「やっぱり、早いんだ。」

「そうね、ツバキさんにも言われたんじゃない？」

「確かに言われたな。」

「まあ、いいわ。蒼影、無茶だけはしないでね。」

「わかってますって。んじゃ、邪魔しても悪いし、俺はどっかいくわ。頑張ってたな。」

「ええ、またね。」

やっぱり、暇だなー。部屋に戻って時計でも完成させるとするか。

神機（後書き）

何か……………。

「どうしたんだよ。」

いやな、自分の読むのってなんか恥ずかしいな。

「なら、何で読んだんだよ。」

いや投稿前には少し読むだろ？でさ、そんなんでこんな書いたんだろうって思うんだよ。書いてる時はいいと思うんだけどな。

「確かに、そういう事あるかもな。作文とか多いよな。」

そうそう。まあ、さらに時間経って読んだら、面白いまでは行かなくても読めるんだけどな。

「あれはどうしようもないんじゃないか？」

やっぱりそうなのか。あれがなかったらいいのにな。

「まあ、なんとか克服？する事だな。」

だな。じゃ、また次の更新で。

明日か明後日にD・C・？を更新するつもりです。

サクヤとの初任務

俺がゴッドイーターになって一年がたった。んで、今日からサクヤさんがゴッドイーターになり、今日はサクヤさんの初ミッションについて行く事になってる。ちなみにリックも数日前に正式に整備班に配属になってる。ちなみに原作キャラである台場 カノン、小川 シュン、カレル・シュナイダーはまだゴッドイーターではない。まあ、原作の一年前くらいにはなってるんだろうけど、原作でもかかれてないしいつかはよくわからない。てかサクヤさんがいまゴッドイーターになるのも結構遅いと思う。まあ、別の世界な訳だし、あまり気にしてないけど。多分原作くらいにはみんな同じような感じになってるんだろうな。

そいえば、少し前にロシアに行ってきた。理由はアラガミの駆除だな。アラガミが異常に多かったみたいで、新型だからか送られた。っていつても、そんなに長い期間ではなかったけど。で、そのときにリディアとオレーシャ、アリサに会った。まあ、アリサとは話したりしてなくて、チラッと見ただけなんだけどな。

リディアとオレーシャとは結構仲良くなっただな。オレーシャからはいつのまにか蒼影兄とか呼ばれてたし。後、リディアは、アリサを心配してるみたいだし、早めにアリサ助けてやりたいな。あと、オレーシャも。小説では、アリサ一回心開くっていうか、立ち直ったけど、オレーシャが死んで、大車にまた洗脳されるんだよな。けど、この世界ではオレーシャも殺させないし、今は無理だけどアリサを早めに救いたい。出来れば、アリサ、オレーシャ、リディアをこっちに連れてこれたらいいんだけどな。まあ、そこは何とかなるだろ。

話を戻すさないと。何だっけな？ああ、そうそう。サクヤさんの訓

練見てたけど、あれなら原作と同じくらいには余裕でなれると思う。そうそう、オペーターはまだヒバリじゃない。多分これに関してももう少し後なんだと思う。

「サクヤさん、待たせて悪い。」

「気にしていないからいいわよ。それにしても、蒼影と一緒になんて思わなかったわ。しかも、先輩だなんて。」

「そうか？俺的にはサクヤさんがゴッドイーターになったほうが驚きだけど。」

いくら原作知ってるっていつても、実際に知ったときはやっぱり驚いたな。

「まあ、いいか。なら、行こうぜ。」

「ねえ、蒼影。」

ミッションに行く途中のへりの中で、サクヤさんに声をかけられた。

「なんだ？」

「蒼影、さん付けるのやめない？」

「どづいづ事？」

「蒼影、いつの間にか敬語とれてるし、なんか違和感あるのよね。」

確かに、敬語とか使ってなかったな。てか、人に敬語使う事あまりないし、サクヤさんの事小さい頃から知ってるしな。

「なら、敬語付けようか？」

「やめてちょうだい。」

「わかったって、ならサクヤでいいんだろ？」

「ええ、それでいいわ。／＼／＼／＼」

なんで照れるのかねえ？てか、名前呼び捨てにされたくらいで照れるキャラじゃないだろ。

「んじゃ、どうすっかな……。」

最近は何人で戦ってることが多かったしな。技能作成《スキルメイク》でいろいろ作りたかったしな。ちなみに作ったのは七獣《セブンスビースト》っていつて五大手品《ファイフスマジック》に似ていて、それぞれの属性の生き物を作る技能だ。ある程度知能はあるし、命令をすれば勝手に行動してくれるから、結構ありがたい。たしか。炎、氷、雷、嵐、岩、神、魔だっけな。

本当は、フェアリーテイルで作った悪魔召喚使デビルサモナーいたかったけど、流石にやめた。アラガミと勘違いされても困るしな。ちなみにこれで召喚してるのはソロモンの悪魔とか、他に有名なやつばかりだ。まあ、契約しないといけないけど。でか、俺が作るのって厨二っぽいのばかりだな。まあ、戦い用ならそうなるのはしょうがない気もするんだけど。

「どつするの?」

そつだ、いまはミツシヨンのことだつたな。サクヤは旧型の銃だし、俺が前で戦つて援護でもしてもらつるか?銃に前で戦えつてのは無理だし。

「なら、援護つて事でいいか。俺が剣で戦うから援護してくんない?」

「それでいいの?」

「いんじゃね?銃は援護がメインだしさ。」

「なら、いいわ。」

それに、他の人も行くだろうし大丈夫だろ。

「んじゃ、他に特にいう事もないし……。ああ、そつだ。無茶はせず、死なないように。生きてれば何とかなるから。」

「わかつてるわよ。」

「んじゃ、行くつか。」

サクヤを連れて、対象のオウガテイルのいる場所へ向かう。オウガテイルは、こちらに気が付いてないみたいだし、今のうちに攻撃するか。まあ、俺はすぐに倒したらいけないし、手を抜かないといけないけど。

「じゃあ、俺が出るから、援護を頼むな。」

「わかったわ。」

オウガテイルの前に飛び出して、オウガテイに斬撃を叩き込む。今回は普段使っている装備より弱い武器を使っているため、そこまでダメージを与える事は出来なかった。そして、オウガテイルの下から退くとサクヤからの射撃がオウガテイルを撃ち抜く。

「つつわ！あつぶね。でも、やっぱり正確だなー。」

サクヤの射撃は的確に当たってるんだけど、一発俺に当たりそうになった。まあ、当たらなかつたし、別にいんだけど。射撃が途切れると、オウガテイルがこちらへ向かってくる。そして、オウガテイルが尾を振ってくる。それを避け、捕食形態へプレデターフォームでオウガテイルを捕食する。そして、手に入れたアラガミバレットをサクヤに受け渡す。

「これはっ……。」

受け取ったサクヤは、驚いているみたいだ。

「そついう事ね！」

多分、アラガミバレットに気が付いたんだろう。俺は、オウガテイルを斬りつけ怯んだ所にサクヤの濃縮アラガミバレットの直撃を受け、活動を停止する。

ふう、やっぱり一人とは違うな。そんな事を考えながら、サクヤの下へいく。

「ねえ、蒼影。さっきのアレって一体なんだったの？」

「アレ？何のことだ？」

「私を強化した、アレよ。なんだか、急に力が溢れてきたけど……。」

「ああ、リンクバーストのことか。そいえば、あれが出来るって新型だけだし、不思議なんだろうな。」

「リンクバーストの事だな、多分。」

「リンクバースト……？一体何なの？」

「サクヤは聞き返してくる。多分、リンクバーストとバーストの違いが分からないんだろう。何が違うのだろうかって感じだろうな。」

「新型神機使い専用の新しい戦術だよ。アラガミを捕喰した際に入手に入るアラガミバレットってのを、他の神機使い？神機なのか？まあいいや。」

「それでいいのかしら？」

「いんだよ。まあ、それを撃ち渡すことで、その人を半ば強制的にバーストさせる方法だな。通常のバーストよりも力の増大が激しいから、バーストLVは三まで。バーストLVってのは、撃ち渡されたアラガミバレットの弾数によって決まるから、今日サクヤが発動したのはLV1のリンクバーストということになるな。」

「へえー……、確かにすごい力だったわね。」

「これからはこの戦術の重要性がどんどん増してくるだろうな。つてか、俺がいる時点で使えるから、結構重要視されてるだろうな。」

「でも、あまり聞かないわよ。」

「まあ、何故か一人つてのが多いしな。んで、メンバー全員を見渡して、その時の状況に応じて、最も助けを必要としている人をバーストさせないといけないし……、捕喰攻撃もなるべく増やして、アラガミバレットを確保して、いつでも仲間をリンクバースト出来なといけないから、たまにしかやってないつてもあるかも。リンクドゥやブレンダン、タツミやジーナは知ってるな。今更だけど、新型神機使いは本当に面倒だ。」

「そっか……。やっぱり大変なのね。」

まあ、慣れたからいいんだけどな。新型神機は、剣、銃、盾、バーストもリンクバーストもできて便利……なんだけど、使える戦術が多いために、やらないといけない事がたくさん出てくるからな。

「しつつかし、サクヤ援護上手いよな。」

「そっかしら?。」

「ああ、まあいいや。戻ろうか。」

ミッションを終わらせて、アナグラに戻る。で、サクヤと別れ少しぶらつく事にした。

「やっぱりたまには誰かと行ったりした方がいいよな……。」

「何がかしら？」

「ジーナか……。ジーナから声かけてくるなんて珍しいな。」

後ろから声をかけてきたのは、ジーナだった。てか、ジーナから声かけられるのってあまりないような……。いや、そうでもないか？

「あら？私から声をかてたらおかしいかしら？というより、あなたには他の人より声をかけてないかしら？」

「確かに、そうだな。」

「そうよ。で、何で悩んでたのかしら？」

「ミッションだよ。一人で行く事多いし、誰かと行ったりした方がいいかってな。」

「そうね……。確かに行った方がいいと思うわよ。」

「なるほどな……。ありがとう、ジーナ。」

「そうね……。今度一緒に行ってくれたら別にいいわ。」

「了解。」

その後、ジーナと少し話して自室に戻って休む事にした。

サクヤとの初任務（後書き）

最近お気に入りが増えなくなったのが悩み。正直、他の人の小説読むと自信がなくなってくる。

カノンのミッション(前書き)

投稿遅れてすいません。お詫び?の代わりに今回はD・C・?とG ODEATERの両方更新します。

カノンとのミッション

「おはよう、蒼影。」

「おお、おはようリックカ。」

「そつだ、蒼影また新人の人行くんだつて？」

「ああ。確か、今日はカノンだったな。」

「さすが生存率100%だよな。他の支部でも有名らしいし。」

リックカが言った生存率100%ってのは、同行した人の事だ。確かリンドウより上になってたよな。そんな感じで新人の同行とかは、リンドウや俺が行く事が多い。

で、さつきリックカに言ったみたいに、今日はカノンとミッションに行く事になっている。確かコンゴウ一体だったな。ちなみに、カノン、ヒバリは少し前にゴッドイーター、オペレーターになっている。他の原作キャラもコウタ、アリサ以外はいる。まあ、もう一年前だし。サクヤがゴッドイーターになって一年だな。

その間、サクヤがゴッドイーターになってからは、特に何もなかったな。

「でも、リックカも凄じじゃん。整備班でも、かなり信頼されてるみたいじゃん。俺もリックカの事は信頼してるから、思いっきり戦えるんだぞ？」

「そう言ってもらえると嬉しいな。なら、その信頼に答えられる様になる為にも、頑張らないとね。」

「頑張りすぎて体壊すなよ？」

「それはこちらのセリフだよ。ちゃんと生きて帰ってきてよ、蒼影。」

「分かってるよ。ちゃんと死なずに帰ってくるから、安心しろ。」
ナデナデ（）」

心配そうにこちらを見てくるリツカの頭を撫でる。単独任務が多いからか、リツカやサクヤ、ジーナも心配してくれてるんだよな。そいえば、俺がいるからカリンドウの単独任務は少なくなってるみたいだ。

「……………そ、蒼影、早く行くよ。／＼／」

「はいはい。」

リツカと話しながら、エントランスに向かう。その間、リツカは顔を赤くしっぱなしだった。その後、リツカと別れてエントランスに行くと、ヒバリに声をかけられた。

「あ、おはようございます。蒼影さん、今度約束守ってくださいね。」

「おはよう、ヒバリ。約束に関してはちゃんと分かっているから。確か明日暇だったはずだから、その時な。」

ヒバリとの約束つてのは、料理だ。ヒバリに料理を作る約束したんだよな。一応、たい焼き作るつもりだけど。この時代たい焼きみたいな複雑な型とかないからな。こんな時代だし、作る所なんてないだろうし。一から作るの面倒だったよ。まあ、技能作成《スキルメイク》使っただけだ。

「なら、明日を楽しみにしてますね。」

「ああ。そいえば、カノンはまだなのか？」

「まだ来てませんよ。あ、カノンさん、おはようございます。」

今来たみたいだな。

「遅くなってすみません、蒼影さん。」

「別にいいけど。なら、行くか。」

「はい。」

「そういえば、蒼影さん。今回蒼影さん達が行く場所の近くに、ヴァジュラがいるみたいなので、気を付けてくださいね。」

「ヴァジュラが？なんでそんな所で新人のミッションさせるんだよ……。」

「蒼影さんが頼りにされてるからじゃないですか？それにそこまで近い訳じゃないみたいですから。」

「なら、簡単には遭遇しないかな？まあ、いいや。」

「気を付けてくださいね。」

「ああ、分かった。」

ヴァジユラか……。とっとと倒してくれればいいのに。まあ、いいや。気を付けておこう。

「蒼影か……。今からミッションか？」

「ああ、ソーマは？」

「特にない。」

「ふーん、なあ、今度一緒に行かないか？」

「……………分かった。」

「よしっ、んじゃ俺は行くな。」

んー、ソーマは相変わらずだな。まあ、俺に対しては結構マシになったけど。二年前から何度かミッション行ったら、何とか仲良くなれたんだよな。他の人には原作通りだけだ。

「蒼影さん、凄いですね。」

ソーマと別れた後、カノンが声をかけてきた。

「何がだ？」

「だって、ソーマさんとあんなに話せて。」

「ああ、アイツもいい奴なんだけどな。」

やっぱり勘違いされやすいよな。

「さてと、カノンは何度か実戦を経験してるんだっけ？」

「はい！でも、誤射が多くて……。」

……そいえばそうだったな。原作もそうだし、一緒に行った事ある奴らも言ってたな。

「ま、まあ、気にせず戦ってみたらいいから。誤射が多いなら、少なく出来るように俺も手伝うから。」

「ありがとうございます、蒼影さん。私頑張りますね。」

「今回はオウガテイル一体だ。だが、油断はするなよ。」
オウガテイル相手なら、そこまで苦戦しないだろう。それに、ヴァ
ジウラもいるみたいだから、早めに片づけないな。

「おっと、いたみたいだな。カノンいけるか？」

「はい。」

「なら、援護を頼む。」

「わかりました。」

こちらに気付いて、向かってくるオウガテイルを斬りつける。オウガテイルは尻尾を振り回し、俺へと針を飛ばしてくる。ギリギリまで引きつけた後、横に回避する。

それと同時にカノンが射撃を行う。三発ほど撃ち、オウガテイルに当たる。……………二発だけ。

ガンッ

「危ねえ。」

カノンの撃った弾丸の一つが俺に向かってきたから、装甲を展開しなんとか防ぐ。

「射線上に入らないでって、私言っただよね？」

……………。いや、俺、射線上に入っていないよな!? しかも、カノン何も言っていないだろ!? ………………落ち着け、俺。

まさか、こんなには。いきなり誤射が来るなんて全く予想してなかったぞ。しかも、かなり性格変わってるよな。こりゃ、いろいろと大変だろうな。

グオオオオオンッ

「っ!?!?」

ヴァジユラか? 声からして二体はいるだろうな……。カノンはまだまだヴァジユラと戦うには早いし、普通なら二体くらい余裕を持って戦えるけど、新人のカノンを庇いながら戦うのはいくらなんでも厳しいな。

となると、カノンには先に戻ってもらわうしかないよな。

「そ、蒼影さん、今のって……。」

「ああ、カノンの考えてる通りヴァジユラだろうな。」

「そんな……………」

やっぱりまだ新人のカノンには、ヴァジユラはかなり怖いんだろうな。

「ここは俺がなんとかするから、カノンは先にアナグラに戻れ。」

「だ、ダメですよ! そんな事したら、蒼影さんが……………」

「大丈夫だって。このくらい何度か相手した事もあるし、悪いけどカノンがない方が戦いやすい。まだ新人であるカノンにはヴァジユラと戦うのは早い。足手まといになるだけだ。」

「……………」

正直こんな事言いたくはないんだけどな。まあ、カノンが死ぬよりもいいしな。

「それなら、アナグラに戻って助けを呼んだ方がいい。まあ、いいとは思っけどさ。」

「……わかりました。蒼影さん、死なないでくださいね。」

「わかってる。」

カノンを先に戻らせ、ヴァジュラの声がした場所へ向かう。そこには予想通りヴァジュラが二体いた。その内一体は、他のゴッドイーターにやられたのか、尻尾が壊されていた。

これなら、ある程度は楽になるだろうな。

神機を銃形態に変形させ、尻尾を破壊されているヴァジュラの背後にまわる。神属性のバレットをセットしヴァジュラを撃つ。

「グガアアツ。」

ヴァジュラがいきなりの銃撃に怯む。オラクル細胞が無くなると、そのまま飛び出てヴァジュラの頭と前足を斬りつける。こちらも弱っていたのか、数度の攻撃で破壊される。

「つとー！」

ヴァジュラに攻撃していると、もう一体のヴァジュラが撃った雷球が俺を襲う。それを装甲で防いで、バックステップで下がる。そして、さっきまでいた場所にヴァジュラが飛びかかってきた。

やっぱりヴァジユラは動きも素早いから、同時に相手するのは面倒だな。

「よし。」

持っていたスタングレネードを使い、ヴァジユラの動きを止め、弱っている方のヴァジユラを斬りつけ、補喰する。弱っていたヴァジユラは補喰によって死んだ。そして、バーストしもう一体に斬りかかる。

「グアアアアアッ。」

ヴァジユラは雄叫びを上げながら、マントを立てて雷をおこし攻撃をする。それをバックステップで避け、神機を再び銃形態に変形させ、バレットを撃つ。オラクル細胞がなくなると、Oアンプルを飲み回復し撃つ。

銃撃により、ヴァジユラの顔と前足が壊れる。

「後、少しか？」

今回は自分がアラガミを倒さないように、装備を弱いのにしてたからな……。

「ガアアアアアッ。」

ヴァジユラが俺に向かって飛びかかってくるのを横に避け、ジャンプをして尻尾を斬りつけ、地面に降りると、体を斬る。そして、ヴァジユラの攻撃を避けながら、尻尾を破壊した後、また体を斬る。

「これでっ、ラストっ！」

その声と同時にヴァジュラは俺の攻撃で倒れる。

「さてコア回収っど。」

倒したヴァジュラからコアを回収し、地面に座る。

「あ……………。帰ったらサクヤやジーナに説教されるかも……………。」

サクヤは昔からだけど、何故かジーナも俺が困ったりしたら、怒るんだよな。まあ、まだ三、四回しかしてないけど。別にそう簡単に死んだりしないから、大丈夫なんだけどな……………。

「んじゃ、帰るとしますか。」

アナグラに帰ると、カノンが抱きついてきた。

「蒼影さん、無事でよかったです……………。」

なんか心配させたみたいだな。

「死なないって言っただろ？」

「はい……………」

「あ、後、あんな事言っつて悪かったな。」

「いえ…………、蒼影さんの言った事は本当の事ですから……………」

「まったく、また蒼影したら無茶をして。」

「悪い、サクヤ。でもまたって言われるほど無茶してないか？」

「三、四回だし。」

「三、四回はそこまで多くないはずだ。」

「十分多いわよ。」

「そうか？まあ、いいや。疲れたし、休んでいいか？」

「はあ…………。もうしないでよね。」

「約束は出来ない。」

まあ、死なないようにするにはするけどな。

「まったく。」

「悪い。じゃ、休むわ。」

「ええ。」

今回は特に怒られなくてよかったな。

カノンのミッション（後書き）

次回はまた早めに投稿します。

休息

さてと、材料は準備出来たな。

後はヒバリが来るを待つて作るだけか。まあ、ヒバリが来る前でもいいんだけど、作ってる所が見たいらしいしな。

その後は、材料は多いから他のメンバーにも分ければいいのか。

「蒼影さんいますか？」

ヒバリが来たみたいだな。

「ああ、鍵はかけてないから入っていいぞ。」

「お邪魔します。」

「やつほー、蒼影。」

サクヤもいるんだな。まあ、別にいいけど。

「サクヤもいるんだな。」

「はい、さっきそこで出会ったので。いけませんでした？」

「いや、別に大丈夫だから。んじゃ、作るか？」

「はい。」

「それにしても、よくこんなに揃ったわね。」

「まあ、いろいろとな。」

えっと、たい焼きの型は一度に十個焼けるように作ったから、九回くらいか。

「えっと、サクヤとヒバリはどうする？」

「私も作っていいなら、やってみたいわ。こつこつ型あまりないしね。」

「私もです。」

「なら、これ使ってくれ。四つ有るし。あー、そつだ。今から生地作るから、少し待ってってくれ。そこにあるのなら、適当に触ってもいいから。」

いろいろと本や昔この世界にあったゲームとか復元したしな。暇つぶしには丁度いいと思う。

「わかったわ。それにしても、また増えたのね。」

「いろいろあるんですね。珍しい物ばかりです。」

確かにゲームや本とかあまりないよな。しかも本は他の世界で買ったのも置いてるんだっただ……。

「蒼影はこんな物よ。何故か昔の娯楽品とか集めて置いてるのよ。面白いのもあるわよ。」

「そうなんですか…。」

材料は十個で

卵・・・1個

砂糖・・・大さじ2

牛乳・・・200cc

薄力粉・・・150g

ベーキングパウダー・・・小さじ1・5と2

サラダ油・・・大さじ1

中身・・・あんこ、チョコレート、カスタードクリーム、チーズと
か適量と。

まずは生地を作らないとな。

「でも、よくこんなに集まりましたよね。」

「そうね、何個か入手が難しいんじゃないの？」

「確かに結構難しかったな。」

折角だからこの世界の材料で作ってたから、他の世界で買った
材料は使わなかったしな。

ちなみに、他の世界の食材はかなり買い溜めして、空間箱《ボックス》
に入れてる。

まあ、いいや。今は生地だ。

まずは、ボールに卵を割り入れて、砂糖を入れて泡だて器で泡立てるっと。

カチャカチャ

んで、ボールに牛乳を入れて、よく混ぜり合ったら、ふるった薄力粉とベーキングパウダーを入れて混ぜ合わせ、最後にサラダ油を入れて全体を混ぜるっと。

これで完成っと。後八繰り返すのか……。腕が痛い……。

「これで生地は全部完成したっと。」

次は、中火で温めた後、弱火で予熱しておいてっと。

「そろそろ焼くから、サクヤもヒバリもやるだろ？」

「はい、えっとどうしたらいいんですか？」

「まずは、型が熱くなったら、最初の一回だけ鉄板にサラダ油を塗るんだ。」

「これで塗るの？」

「ああ、型は温めているから、もう塗っていいぞ。」

「わかりました。」

「で、まずは大きじ二杯程度の生地をゆつくりと流し入れ、あんことか具材を中心部分に乗てくれ。で、具材の上から生地を流し入れて、完全に覆うように、型全体に流し入れるんだ。」

今回用意した具材はあんこにカスタード、チョコレートにイチゴ味の餡だな。イチゴ味は作るのに時間がかかった。ちなみに、あんこは粒あんだ。やっぱりたい焼きは粒あんだよな。大福とかはこしあんだけど。

「最後に蓋にする方の型に、生地を塗るんだけど、生地をつけ過ぎると、ボタボタと垂れてしまって、後片付けが面倒になるので注意してくるよ。で後は、蓋を閉じて、四々五分焼いたら出来上がりつと。取る時は、竹串で尻尾の方からゆつくりと持ち上げて、鉄板から離れたらいいから。」

「わかりました。」

「わかったわ。」

後は繰り返すだけか。サクヤもヒバリも作り方は今ので分かっただろっし、結構楽に終わりそうだな。

「やっと出来たな。というか、予定していた数より多かったな。」

「これ分けたとして食べられるかしら？」

「一つ一つが小さいですから、なんとかなるかもしれませんが……」

「一応、普通のたい焼きより小さめに作ったとはいえ、さすがに百個近くは作りすぎたな……。結構楽しかったから、歯止めが効かなかったんだよな。この世界で誰かと作る事とか少なかったから……。特にデザート系はほとんど作らなかったから、材料集めから間違ってたな……。」

「ま、まあ、まずは味見だな。不味かったら分けられないし。」

「それは大丈夫と思いますけど。美味しそうですし。」

「んじゃ、俺はイチゴを……。」

「私にあんこをいただきますね。」

「なら、クリームにしようかしら。」

「……。うん、結構上手いな。たい焼きは二回目だから心配だったけど、ちゃんと出来たな。」

「おいしいですね。」

「そうね。これなら、十分みんなに分けれるわね。」

「だな。まあ、これが料理かって言ったら微妙だけど。まあ、次はもっと凝った物を作るか。」

「その時は、また呼んでくださいね。」

「私もいいかしら?。」

「俺はいいけど。まあ、それはその時になったらな。」

次もデザート系作りたいな……。

「じゃあ、行きましょう。エントランスに行けば、人も多いと思うわ。」

「そうですね。今日はジーナさんやカノンさん達もミッションに行つてないですし。」

「んじゃ、行くか。後、適当に呼んでこよう。」

「お願いするわ。」

支部長は……まあ、いいや。榊博士呼んでくるか。後、リツカとツバキさんは、エントランスにはいないだろうから、呼んでこないとな。

「入っていいですか?。」

「蒼影君かい?入っていいよ。」

「失礼します。榊博士、たい焼き作ったから一緒に食わない?。」

「私もいいのかい？」

「いいから呼んでんだって。で、どうするっ。」

「なら、行かせてもらっよ。」

「なら、エントランスで。俺は次行くんで。」

相変わらず榊博士の部屋は汚いな。もう少し綺麗にしたらいいのにな。たまに榊博士の部屋行くけど、毎回汚いんだよな。

さてと、次は……ツバキさんは分からないから後にするとして、リツカは多分整備班の所にいるだろうし、整備班の所に行くか。

「リツカは……、いたいた。」

神機の整備してたみたいだな。でも、丁度終わった所か？

「よっ、リツカ！」

「きゃっ！な、何！？」

「あー、なんか悪いな。」

思ったより驚いてるよ。てか、驚かすつもりはなかったんだけどな。

「そ、蒼影なんだ。ビックリしたよ。」

「悪いな。驚かすつもりはなかったんだけど。」

「それより、蒼影どうしたの？」

「ああ、たい焼き作ったからな。みんなで食べようと思って呼びに来たんだよ。」

「そうなんだ。神機の整備も一段落したし、行こっかな。」

「なら、エントランスな。そいえば、これ俺の神機だな。」

さっきはよく見えなかったけどな。近くで見たら、さっきリツカが整備してたのって俺の神機だったんだな。

「うん、そうだよ。やっぱり蒼影の神機って結構傷が多いね。」

「やっぱり？」

「うん、蒼影は単独でミッションに行っていたりしてたからね。一人で戦ってたら傷も多いと思ってね。」

確かに一人で戦ったら傷は増えるだろうな。一人ですべて相手するんだし。

「まあ、大丈夫だよ。リツカが整備してくれてんだし。」

「いくら整備しても、蒼影が無茶したら意味ないんだから。」

「無茶してないから、大丈夫だ。」

「昨日普段と同じ装備じゃないのに、ヴァジュラ二体と戦うのは無

茶じゃないのかな？それに、自分だけで倒さないように、弱い武器だったよね？」

「……………」

確かに、昨日装備が万全じゃなかったのは、事実だしな……………。

「蒼影が傷ついたりして、悲しむ人は大勢いるんだからね。もちろん私もそうだよ。」

「……………」

悲しむか……………。守りたくてこの世界の力を手に入れたのに、悲しませたらいけないよな。

「そりゃあ、ゴッドイーターなんだし、少しは無茶をしないとイケないかもしれないよ？でも、蒼影の無茶は行き過ぎだよ。」

「気を付けるよ。」

「なら、これで話は終わりだよ。みんなが待ってるんでしょ？早く行こうか。」

「ああ。」

後はツバキさんだけど、どこにいるかわかんないんだよな。後、来てくれるかも。まあ、一回エントランスに行くとするか。

「お待たせー。ツバキさん今から呼んでくるから、もう少し待っててくれ。」

「あ、その必要はないわよ。さっき私が呼んできたから。」

「分かった。ありがとう、サクヤ。」

今エントランスにいるのは、リツカ、ヒバリ、カノン、サクヤ、ジーナ、ツバキさん、シュン、カレル、ブレンダン、タツミ、エリック、リンドウ、榊博士、ゲンさん、ソーマだ。

正直、ソーマが来てくれたのは結構嬉しかった。ソーマは結構嫌われてるしな。

「しかし、よくこれだけ揃ったな。」

「蒼影の人望ってか？」

「なわけないだろ。人望ならリンドウの方が上じゃないか？」

「俺より活躍してるヤツが何言ってるんだよ。」

「そうよ、蒼影。リンドウさんよりはいいわよ。人間としても。」

「そうか？」

みんながたい焼きと適当に買った飲み物を食べてるのを見ながら、リンドウと話していると、ジーナが声をかけてきた。俺的には、リンドウの方が上だとおもうんだけど。

「おい、ジーナ、人間としてもってなんだよ。」

「そのままの意味よ。」

「そうね、煙草ばかり吸ってるリンドウよりずっとマシね。」

いつの間にかやってきていたサクヤもジーナに同意する。二人共酷いな。まあ、リンドウの煙草の吸い過ぎは同意するけど。後、酒もか。

「そんな事より、リンドウにジーナ、味どうだった？」

「美味しかったわ。」

「上手かったけど、よくあんな形の型が手に入ったな。」

「まあ、いろいろと。」

自分で作ったなんてさすがに言えないしな。

あ……………。そいえば、ジーナ達に時計渡してなかった。丁度いいし、今の内に渡しておくか。

「ジーナ、これ渡しておくよ。」

「何かしら？……時計？」

「ああ、これか。蒼影、他のヤツに渡してなかったのか？」

「ああ、忘れてて。他の人にも渡してくるから。」

前にサクヤとツバキさん、リンドウには渡してたんだよな。

「ありがとう、蒼影。大事にするわ。」

結構喜んでくれたみたいだな。次は……ソーマとカノン、リツカ、ヒバリだな。ソーマは相変わらず一人でいるみたいだな。

カノン達はガールズトークって感じか？内容聞こえないけど。

「ソーマ、楽しんでるか？」

「蒼影か……。」

「相変わらずみたいだな。まあ、いいや。コレ。」

「時計のようだが……。何のつもりだ？」

「趣味ついでにな。受け取ってくれるよな？」

「……まあ、もらっておじう。」

すんなり受け取ってもらえてよかったな。ソーマこういうの嫌いそうだし、簡単には受け取らないかと思ったな。まあ、無理にでも渡

すつもりだったけど。

「んじゃ……………っと、そうそう。たい焼きどうだった？」

「不味くはなかった。」

「なら、よかった。じゃあ、またな。」

ソーマが素直に言うとは思ってなかったし、不味くはなかったってなら、いい方だろう。

次はリツカ達だな。

「あ、蒼影さん。」

「カノンか、話の邪魔して悪いな。」

「いえ、気にしないでください。」

「どうしたの、蒼影？」

「ああ、これを三人に渡そうとな。」

「時計ですか？」

「ああ、結構頑丈だから簡単には壊れないから。後、御守りにもなるな。」

一応、技能作成で持ち主守るようにしてるしな。アラガミでも少しなら、何とかなるしな。

「いいんですか？」

「ああ、裏に名前彫ってるから。」

「ありがとう、大切にするね。」

「ありがとうございます、蒼影さん。」

「ありがとうございます。」

………ヒバリに渡した時、なんか殺気の籠もった視線がきたな。多分、タツミだろう。

さて、他の人にもっと。

渡したはいいけど、カレルとか売られそうで怖いな。まあ、渡した以上文句は言わないけど。

てか、全部無くなったみたいだな。余らなくてよかった。

さて、明日からはまたミッションだし、片付けしないとな。

休息（後書き）

次は多分、1月4日以降になりそうです。出来たら早めにするので、待っててください。

ロシア支部への移動(前書き)

転生して異世界廻り〜FAIRY TAIL編を公開しました。良かったら読んでください。

ロシア支部への移動

ミッションから帰ってきたら、支部長室に呼ばれたんだけど、一体なんなんだろうな。

コンコン

「入りたまえ。」

「失礼します。」

中に入ると、支部長と榊博士がいた。榊博士？

「今日呼んだのは、君に行ってもらいたい場所があるからだ。」

「他の支部に行けって事ですか？」

「その通りだ。君にはロシア支部に行ってもらいたい。君は前にも一度行っているから、やりやすいだろう。」

「確かに一度行ってますが、それならリンドウでもいいんじゃないですか？」

「リンドウ君には別の事を頼んでるみたいなんだよ。蒼影君、行ってくれないか？」

さっきまで黙っていた榊博士が、俺を説得してきた。まあ、ロシアにはオレーシャ達いるから、別にいいか。原作前に極東支部に戻ってこれるなら、それでいいしな。

「わかりました。何時行けばいいんですか？」

「出来るなら明日にでも行ってもらいたい。」

明日って……。もっと早くに伝えてくれればいいのに。まあ、特
に持って行く物はないし、すぐにでも準備は出来るからいいか。

「わかりました。なら、早速準備するので。」

「ああ、頑張ってくれたまえ。」

「失礼します。」

支部長室を出るとつい溜め息をつく。

これから少し準備をして、他の人にロシア支部に行くのを伝えとか
ないといけないし、結構やらないといけない事多いな。やっぱりも
っと早く言ってくれたらよかったんだよ。

「まずはエントランスに行くか。少なくともヒバリはいるだろうし。」
「

運が良かったら他の人もいるだろうしな。

「あ、蒼影。さっき支部長に呼ばれてたけど、どうしたの？」

エントランスに行くと、リツカとヒバリがいた。クッキー食ってる
し、息抜きでもしてたのか？ヒバリはコーヒーだけど、リツカは相
変わらず冷やしカレードリンクを飲んでいる。

クッキーに合うのか？

「ああ、少しな。明日にでもロシア支部に行かないといけなくなっ
てな。」

「急ですね。蒼影さん一人ですか？」

「そうみたいだな。」

「でも、どうして蒼影さんなんでしょうか？」

「たしか、蒼影って前にもロシア行ってたよね？だからじゃないか
な？」

「そうだったんですか？」

「ああ、前はリンドウと一緒にだったな。」

その時はリツカはいたけど、ヒバリはいなかったんだっただな。なら、
知らないのも当然か。

「それで来たの？」

「ああ、どれくらいになるかわからないし、挨拶はしとかないとな。
」

「蒼影さん、ジーナさん達がそろそろ帰ってきますから、待ってた
らぶじつですか？」

ジーナ達ミツシヨンに行つてたんだな。なら、少し待つておくか。

「そうするよ。」

「あ、食べますか？」

そういつてクッキーを差し出してくれる。

「ああ、貰つよ。」

ついでにさつき買ったイチゴ・オレと冷やし中華ドリンクを取り出す。

「これあげるよ。飲んでみたら？」

これは榊博士と協力して作ったものだ。冷やしカレードリンクみたいに冷やしシリーズを作つてみたくなって、試しに作つてみた。まだ試作品だから、缶は真つ白だ。

「なにこれ？」

「冷やしシリーズ。」

「冷やしシリーズって、冷やしカレードリンクみたいなのですか？」

「ああ、榊博士と作つてみた。」

「少し飲んでみようかな。」

リツカが飲んでくれるみたいだな。

「あの、蒼影さん。あれって美味しいんですか？」

「……………」

「そ、蒼影さん！？何か言っってくださいよ！？」

そいえば、冷やし中華ドリンクを飲んだ榊博士は倒れたんだよね……。ちなみに冷やし中華にしたのは、他に思い付かなかったからなんだよな。

「あー、まあ、榊博士が倒れたとだけ。」

「リツカさん、飲んだら駄目ですよ！？」

「え？」

ヒバリに反応してリツカが缶を置く。

「お！喉渴いてたしこれ貰うな。」

ちよつとそこを通ったタツミが飲む。

「あー！」

「ゴボアツ！な、なんだ……………これ……………」

ヒバリが止めるが遅く、タツミが倒れた。

「やっぱりか。」

「やっぱりって！？蒼影私に何飲ませるつもりだったの!？」

「何って、冷やし中華ドリンクだよ。試作品で、榊博士作の。」

「リツカさん、飲まなくて良かったですね…。」

「うん、それよりそんな物を飲ませようとした蒼影が信じられないよ。」

「悪い悪い。(ナデナデ)あ、俺行くな。タツミいるなら、他の人帰ってるだろうし。後、クッキー美味かったよ。」

「ありがとうございます。また、作ったら食べてみてくださいね。」

「ああ、その時は呼んでくれ。(ナデナデ)」

てか、あれってヒバリが作ったんだな。ちなみに、リツカはずっと顔を赤くして黙ってた。最後はヒバリもだったな。やっぱり頭撫でられるの恥ずかしかったのか？

「さてと、次は誰にするかな。」

「よう、蒼影。どうしたんだ？」

「リンドウにソーマ、エリックか。珍しい組み合わせだな。」

「そうかい？」

「ああ、リンドウとエリックならまだ分かるけど、ソーマは俺以外

とはあまり仲良くしてないしな。」

「ああ、なるほどね。」

「言われてるぞ、ソーマ。」

「ふん……。」

そいえば、原作ではエリック死んだけど、そんな悪いヤツじゃないしな。出来たら助けたいよな。

「それより、聞いたぞ。蒼影、ロシアに行くんだってな？」

「聞いた？誰にだ？」

俺はリツカとヒバリにしか言ってないし、リンドウが知ってるはずないんだけど。

「あ？榊のオッサンが言ってたぞ。」

「僕も聞いたよ。」

あの人が言いふらしてんだよ。てか、他にも誰か聞いてるのか？

「後、カノンやサクヤも知ってたな。」

「さっきジーナもいたみたいだから、ジーナも知ってると思うよ。まあ、ロシアでも頑張りたまえ。」

「ああ。んじゃ、他にも挨拶行くから。」

「蒼影、あいつらなら向こうにいた。行くなら、早く行け。」

「ああ、ありがとうな、ソーマ。」

ソーマに礼を言って、教えられた方へ向かう。しかし、ソーマも丸くなったよな。

「さてと、サクヤ達はっと。確かこっちだよな。」

リンドウ達が言うには、三人いたみたいだしそのままいてくれたら楽だな。

「蒼影さんも大変ですよね。」

ん？この声はカノンか。

「そうね、でも実力もあるし、本部にも認められてるみたいだし、しょうがないんじゃない？」

「そうよ、私達も助けられているのだし。」

サクヤにジーナもいるみたいだな。まだいてくれて良かったよ。

「サクヤ、ジーナ、カノン。」

「蒼影さん、どうしたんですか？」

「挨拶だよ。ロシアに行くから当分帰ってこないと思うし。」

「別にいいのだけど。」

「そうよ、それに蒼影は連絡してくるつもりでしょ?」

確かに、サクヤの言うとおりたまには連絡しようとは思ってたけどさ。やっぱり心配だしな。

「そうだけど、やっぱり挨拶はいるだろ。」

「蒼影さん、頑張ってくださいね。」

「ああ、カノンも誤射減らすようにな。」

カノンの訓練には何度か付き合ったけど、あまり減らなかったんだよな。何度か本気で危なかったし。

「はい……、頑張ります。」

「ジーナもサクヤも死ぬなよ。」

「あなたもね。」

「蒼影、無茶はしないでちょうだいよ。」

「わかってるって。じゃあな。」

一応挨拶はしたし、後はオレーシャとリディアに一応伝えておくか。

『蒼影兄、どうしたの?』

リディアに連絡したのに、何故かオレーシャが出ただけだ。一緒にリディアもいるから間違いではないみたいだな。

「オレーシャか。実はそつちに応援？で行く事になってな。伝えておこうと思ったんだよ。」

『本当に！？リディア姉聞いた？蒼影兄が来るんだって！』

『聞いたわよ。だから、オレーシャは少し落ち着いたらどう？』

「あー、オレーシャは放っておいて、ま、そういう事だから。またな。」

『ええ、楽しみにしてるわね。』

「じゃあな。」

さてと、んじゃ準備するか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1174z/>

転生して異世界廻り～GOD EATER 編～

2012年1月6日18時56分発行